

翻刻・原長右衛門「書法録」他

——農家文書の書札——

藤 村 潤 一 郎

ここに翻刻する(一)安政四年巳ノ十二月吉日、原長右衛門「書法録」、(二)年不詳「(田畑譲証文案)」、(三)明和七年正月「(先納金借用証文・米前金元金滯候ニ付添証文案)」は、国立史料館所蔵相模国大住郡土屋村原家文書(文書記号二四Eで、史料番号は(一)一〇六三、(二)二三一六、(三)二二六三である。

(一)は縦約一六・〇センチ、横約一〇・七センチの簿冊で四目綴である。

原長右衛門寛栗は文政五年九月二六日に生れ、明治一九年八月二二日に年六四才で歿した人物である。原四郎兵衛寛俊の嫡子で幼名は豊平と称した。原家は元文期以降代々旗本窪田氏土屋村分知行所名主を勤め、彼は嘉永四年正月に名主役見習仰付になり、安政三年九月二八日に豊平改長右衛門になり名主役申付となっている。同四年四月一三日に家督を相続した。父原四郎兵衛寛俊は万延二年二月二二日に歿している。ついで慶応三年三月には伴小太郎に名主役見習申付があり、明治二年迄は彼が名主役であった事が確認されている。従って「書法録」は家督相続をし、名主になった時点で作成されたものと考えられる。

(二)は折本であるが、表紙は失なわれており、本文は後欠である。表紙は本文と異った紙質のものと推測されるが、表紙のり代部分と、表紙裏に当る部分は汚れており、後筆の落書があるので、相当に以前から表紙は失くなっている。

年代は不明だが、(一)以前である事は確かである。

(三)は書付である。これは下書の可能性がある。

近世の農家文書で、家としての書札がある事を伺わせたのは、甲斐国山梨郡下井尻村依田家文書の土地証文が全て依田家の筆跡で、売主は単に印を捺した丈けと考えられた事である。次に天領の場合に、各村からの上申文書が、同一事項で余りばらばらでは処理に困るだろうと、職場での経験から類推される事である。昭和三〇年代初頭に下村富士男先生から岐阜県下の農家文書で書札があるから見ておいたらとのご教示をいただいたが、実現できなかった。

その後、職場で文書整理に際して注意していたが、(三)の書付に類するものは気付いたものの、書札は見当らず、原家文書で気付いたので翻刻する。恐らく他にも多いと思うから今後も注意したい。

平出、抬頭、欠字はその儘とし、変態仮名は現行の字体に改め、古体、異体、略体の文字は現行の文字に改めたものが少なくない。本文は抹消部分は「」で示し、脇に(抹消)と傍註し、訂正文は傍に記した。朱書については(朱書)と傍註し、関係部分に「」をつけて示した。後筆については(後筆)と傍註し、関係部分に「」をつけて示した。原本のままに従ったことを示す場合には(ママ)と傍註した。本文中、欠損の箇所は□を以って示し、(虫損、破損)と傍註した。なお全文に亘り原本にない句読点を補った。

安政四年

一 書法録

巳ノ十二月吉日

(表紙)

書 法 録

原長右衛門

年号

月日

組合証人

何右衛門印

(本文)

爲質地相渡申田畑地証文之事

(抹消)

「金子有合ニ相渡申畑地証文之事」

字何所

何村

一上畑何反何畝何拾何歩 分米何石何斗也

何右衛門殿

此地代金何拾何両也

右之畑地此度貴殿立相渡シ、右之地代金何両、唯今不殘

相渡申流地証文之事

槩ニ請取申所実正也、当御年貢御未進御上納仕満足ニ存

字何

候、然ル上ハ来何年々貴殿方ニ而、御年貢諸役萬事本分

一何田畑何反何畝何歩 分米何斗

同様ニ御勤被成、諸事名式同様ニ御支配可被成候、勿論

(抹消)

右地代金不殘返済申候ハ、右畑地無相違御戻し「可給

可給候、尤地代金相滞申候内ハ、此証文ヲ以何々年茂畑地御

支配可被成候、ヶ様ニ相極申候上ハ、此畑地ニ付、横

(抹消) 質地証文

合々少茂構申者無御座候、爲後日「金子有合ニ相渡申証

文」加判仍而如件

畑地渡し主

間敷候、爲後日仍而如件

ハ、加判之者共罷出、急度埒明、貴殿へ少茂御苦勞懸申

何村流地渡主

誰印

組之内

年号月日

誰印

同

誰印

名主

誰印

と、都合金高何拾兩ニ罷成候、然ル上は来ル何年ノ貴殿方ニ御年貢諸役御勤被成、御支配被成、永々名式ニ可被成候、々様ニ過分成金子給候上ハ、此畑地ニ付、諸親類は不及申、横合ノ少茂構申者無御座候、子々孫々ニ至迄、毛頭申分無御座候、爲後年、畑地讓渡申証文加判仍而如件

畑讓主

何兵衛印

何右衛門殿

親類加判

年号月日

何右衛門印

讓渡申畑証文之事

組合証人

字何

一上畑何反何畝何歩 分米何石何斗

名主

何右衛門印

此地代金何兩也

何村

何右衛門殿

右之通讓渡申所実正也 此畑地之儀は、先年地代金何兩ニ而質地ニ相渡置候所、貴殿事数年懇ニ働被下候ニ付、忝存、此度右之畑其方ニ讓渡申候得は、爲祝金ト唯今金子何兩給、弥以忝存候、依而先年之地代金と当分之祝金

年季ニ相渡申畑証文之事

字何

一何田畑何反何畝何分 分米何斗何升也

此地代金何兩也

右之畑地相渡地代金何兩錢ニ請取、当御年貢御上納致、満足ニ存候、然ル上は来何年々、貴殿方ニ而御年貢御上納諸役共御勤被成、諸事名式同様ニ御支配可被成候、勿論年季之儀は当何年々来ル何年迄、何々年季ニ相渡、右ノ年季明、地代金不残相済申候ハ、書面之畑地無相違御戻可給候、地代金相滞申候内は、年季明候共、此証文ヲ以、何々年も御支配可被成候、ヶ様ニ相極申候上は、此畑地ニ付、外々一切構申者無御座候、爲後日加判、仍而如件

畑地讓主

何兵衛門印

年号月日

証人納之内

何右衛門印

村

何兵衛殿

翻刻・原長右衛門「書法録」他（藤村）

前書之通相違無之ニ付、奥印

名主

長右衛門印

手前へ取年季証文、尤手前斗へ可書事

年季ニ相渡申畑地証文之事

字何

一何田畑何反何畝何分 分米何斗何升

此地代金何兩也

右之畑地相渡地代金何兩錢ニ請取、当御年貢御上納致、満足ニ存候、然ル上は来何年々貴殿方ニ而、御年貢御上納諸役共御勤被成、諸事名式同様ニ御支配可被成候、勿論年季之儀は当何年々来ル何年迄何々年季ニ相渡、年季明何年ニ罷成、地代金不残相済申候「（株地）ハ、節は」、書面之畑地御戻し可給候、ヶ様ニ相定申候上は、此畑地ニ付、外々一切構申者無御座候、爲後日加判、依而如件

土屋村

畑地讓主

何兵衛印

何右衛門印

年号月日

組之内証人

何村

何右衛門印

何右衛門殿

組頭加判

何右衛門印

姓名書願ニ来リ候人^江遣ス節覚

村

覚

長右衛門殿

窪田主水知行所

相州大住郡

小作請証文之事

土屋村

百姓

何兵衛

一字何^ニ而何畑何反何畝何歩、我等勝手ヲ以小作^ニ相預
リ候所実正也、右畑小作御年貢之儀は、五月大麦何俵
何斗、八月大豆何俵何斗^{〔朱書・後筆〕}「譬何様之違作等有之候共」

右之通り相違無御座候、以上

無滞年々兩度ニ急度差上可申候、若又相滞申候得は、

名主

加利之者罷出、急度埒明、貴殿^江少茂御苦勞相掛申間

何右衛門印

數候、爲後日小作請負証文仍而如件

小作預リ主

差出申拝見書之事

年号月日

何兵衛印

一今般從

組之内請人加判

何野何之守様御尋之儀被爲在、早々可罷出旨 御差紙

貴殿方御達被下、拜見承知奉畏候、然ル上は早々罷
出着御届ケ可奉申上候、尤御差紙表裏共、墨附汚等一
切無御座候、依之請書差出申所如件

窪田主水知行所

相州大住郡土屋村

安政何何年

名主

何月何日

組頭

何屋

何右衛門殿

差上申御請書之事

窪田主水知行所

相州大住郡土屋村

百姓ニ而質屋

何兵衛

一今般從

翻刻・原長右衛門「書法録」他（藤村）

坂井右近様御役所、右之者江御尋之儀御座被在爲、来
ル四日朝四ツ時、村役人差添罷出、可相届旨之、御差
紙写ヲ以御達シ被下、拜見承知奉畏候、然ル上は御
差日無遅滞、村役人差添出府着御届ケ可奉申上候、爲
後日御請書一札差出シ申所、仍而如件

右土屋村

安政何年

名主

何何月幾日

何何屋何右衛門殿

差上申場所書之事

相州大住郡何村出生

所持品

一木綿何色嶋女男給帶單物 幾ツ

一同茶紺何嶋半てん 幾ツ

ノ何品

右之者兼而御尋者ニ付、今幾日何時頃、村方地内々ヲ以、

御召捕ニ相成、早速私共立合之上、御改被成候所、当人所持之品、前書之通相違無御座候、且御召捕方ニ付、御悲分成儀、毛頭無御座候、仍之立合書面一札、仍而如件

右 何吉へ

窪田主水知行所

年号月日

相州大住郡土屋村

名主

長右衛門印

火附盜賊御改

何之何様御組

何ノ何右衛門様

送り一札之事

一当村百姓何右衛門伴何吉と申者、当何ノ何拾才ニ罷成候所、其御村方百姓何右衛門聿ニ縁付参り候ニ付、田畑山林敷金等附遣シ不申候、勿論御法度之宗門之類族之者ニ而は一切無御座候、且又右之者ニ付、何方々少茂搦申者無御座候、依之己来村方人別相除、其御村方

人別ニ御差加可被成候、爲後日村送り一札、仍而如件

窪田主水知行所

安政何年

何ノ何月日

名主

長右衛門印

何ノ何様御知行所

何州何郡何村

御名主

何兵衛殿

往来手形之事

一此何々房と申僧老人、当何ノ何十才ニ罷成候所、生国相模国大住郡土屋村、何堂守ニ紛無御座候所、今般心願ニ付、諸国神社佛閣順拜致度候ニ付罷出申候、国々御閑所無相違御通被爲遊可被下候

一此者行暮候節は、一宿之儀御願申上候、若又何国ニ而も相煩候而、相果候節は、其所之御作法通ニ御葬可被

下候、尤国元正は御届ケニ及不申候、宗旨之儀は真言宗ニ而、御法度之宗門ニ而ハ一切無御座候、則寺送り状持参仕候、爲後日往来手形一札、仍而如件

相模国相州大住郡

土屋村

年号月日

名主

印

国々

御関所

御当番衆中様

宿々在町

御役人衆中

往来手形之事

一此何兵衛と申男老入、当何ノ何拾才ニ罷成候所、生国相模国大住郡土屋村百姓何右衛門伴ニ御座候所、今般心願ニ付、伊勢参宮支度候ニ付罷出申候、若何国ニ而相煩候而相果候得は、其所之御作法通ニ御葬可被下候、

翻刻・原長右衛門「書法録」他（藤村）

若又此者行暮候節は、一宿之儀御願申上候、但シ宗旨之儀は真言宗ニ而、御法度之宗門ニ而ハ一切無御座候、則寺送り状持参仕候、爲後日往来手形一札、仍而如件

相模国大住郡土屋村

名主

年号月日

宿々在町

印

御役人衆中

差上申手形之事

一此者何人伊勢参宮
富士登山
伊豆山迄仕候間、又ハ罷通候間

御関所無相違被遊御通、被下置候様奉願上候、爲後日仍而如件

窪田主水知行所

相州大住郡土屋村

名主

安政七庚申年

長右衛門印

三月幾日

箱根 根荷川

矢倉沢

御関所

御当番中間様

二 (田畑讓証文案)

(表紙欠)

(本文)

金子有合ニ相申畑地証文之夏 用也

在所

一下畑何反何畝何歩

此分米何斗三升也

此地代金何兩何分也

右之畑此度貴殿^五相渡シ、地代金何兩何分唯今慥ニ請取

申所実正也、当御年貢ニ「御未進^(後筆)ニ」御上納いたし、満

足ニ存候、然ル上者「来何年^(後筆)」貴殿方ニ而、御年貢諸

役萬夏相勤被成、諸事名式同様ニ御支配可被成候、勿論
右地代金不殘返済申候ハ、右畑地無相違御戻シ可給候、
尤地代金相滯申候内は、此証文ヲ以何ヶ年茂畑地御支配
可被成候、ヶ様相極申候上は、此畑地ニ付、横合^(後筆)少茂
搦「申者」無御座候、爲後日金子有合ニ相渡申証文加判、
仍而如件

畑地相渡主

何右衛門

年号

組内証人

月日

名主

当名

讓渡申林証文之夏

在所

一林^(虫損)壺□所

此輪真木何束也

此地代金四兩貳分也

右之林讓渡申所実正也、此林之儀者先年地代金三兩ニ而、

年季ニ其方^五相渡置申候所、「此度」貴殿夏数年萬事懇

ニ働被下候ニ付添存、此度右之林其方立讓申候得は、爲
祝金唯今金子壹兩貳分給、慥ニ請取、弥以満足ニ存候、
然ル上ハ「(抹消)当何年」より貴殿方ニ而御年貢「(抹消)諸役」御
「(抹消)勤」被成、諸諸名式ニ可被成候、ヶ様ニ過分之金子給
候上ハ、此林ニ付、諸親類ハ不及申、横合茂少、茂搦申者
無御座、子々孫々ニ至迄、毛頭申分無御座候、爲後年讓
渡申証文加判、仍而如件

讓渡申田地証文之夏

用也

在所

一上田何反何畝何步 此分米

此地代金拾兩也

右之通讓渡申諸実正也、此田地之儀者、先年金子有合ニ
地代金八兩ニ而相渡置候所、貴殿事数年懇ニ働被下候ニ
付、忝存此度右之田地「(抹消)貴殿」方立讓渡申候得は、爲祝
金唯今金子貳兩給、弥以忝存候、依而先年之地代金と当
今之祝金と都合金高拾兩ニ罷成候、然ル上者来ル何年（後兼）
貴殿方ニ而、「御年貢諸役御勤メ」被成、永々名式ニ可

翻刻・原長右衛門「書法録」他（藤村）

被成候、ヶ様ニ過分成金子給候上者、此田地ニ付、諸親
類ハ不及申、横合茂少茂搦申者無御座、子々孫々ニ至迄、
毛頭申分無御座候、爲後年田地讓渡証文加判、仍而如件

譲り主

親類

組合

名主

年季ニ相渡申山林証文之夏

在所

一山林ヶ所 此輪真木何束也

此地代金何兩也

右之通相渡地代金何兩、唯今慥ニ請取、当御年貢御上納
いたし満足ニ存候、但シ、年季之儀者、当戊年「(後兼)十二月」
来申十二月迄中、年拾ヶ年季ニ相定申候所実正也、此
林御輪真木、年々貴殿方ニて御上納可被成候、尤年季明
地代金不殘相返申候ハ、山林無相違御戻シ可給候、勿
論右地代金相滞申候内者、何ヶ年茂此証文ヲ以御支配可

被成候、ヶ様ニ相極申候上は、此林ニ付、横合も少茂構申者無御座候、爲後日山林年季証文加判、仍而如件

山林渡主

組合証人

名主

年季ニ相渡申山林証文之夏

用也

一山林沓ヶ所 此輪真木沓束也

此地代金何兩也

右之通相渡申候所実正也、此林地代金之儀者、当御年貢ニ差詰、右之林相渡、地代金唯今不殘髓ニ請取、御年貢御上納仕、満足ニ存候、但年季之儀者、当酉十二月も来ル未十二月迄中、年拾ヶ年季ニ相定申候、尤此林御年貢輪真木、年々御触出之通、其方ニ而御上納可被成候、ヶ様ニ相定申候上者、何様之義御座候共、年季之内者、請返シ申間敷候、然ル上者、来ル戌年も其方ニ而御手入被成、上木下草落葉等迄、貴殿御心任ニ御支配可被成候、勿論年季極り、来ル未十二月ニ罷成、右之地代金何兩返

金仕候ハ、上木御伐取黒土ニテ御返シ可被成候、年季明候而も地代金相滞申候内者、此証文ヲ以、何ヶ年茂林御支配可被成候、此林ニ付、諸親類ハ不及申、横合も少茂構申者無御座、爲後年林年季証文加判、仍而如件

讓渡申畑林証文之事

一山畑

分米

一下畑

一上畑

三口反別合何反何せ何分

一林沓ヶ所

此輪真木何束宛

畑地代金合テ六兩也

右之畑林、此度貴殿方に讓渡申所実正也、此畑林之儀者、先年地代金三兩貳分ニ而年季ニ相渡置候所、貴殿亘数年懇ニ働被下候ニ付、忝存此度右之畑林共讓渡申候得は、爲祝金と只今金子貳兩貳分給、御年貢御未進ニ致御上納弥以忝存候、然ル上者来何年も貴殿方ニ而御年貢諸役輪真木共、(後條)「年々」御上納被成、貴殿任御心、御手入被成、

諸名式ニ可被成候、ケ様ニ過分之成金子給候上者、此畑
林ニ付、諸親類ハ不及申、横合ヨコグ少茂構無之、子々孫々
ニ至迄、毛頭申分無御座候、爲後日畑林讓渡申証文加判、
仍而如件

金子有合ニ相渡申畑地証文之事
在所何所
他所ニ入石ニ渡ス扣

一下畑何反何せ分 分米

此地代金何拾何兩也

右之畑地相渡地代金何拾何兩、唯今慥ニ請取、当卯之御
年貢ニ致御上納忝存候、然ル上ハ貴殿方ニ而御年貢諸役
萬夏御勤被成、本分並合ニ御勤可被成候、勿論右地代金
出来、不殘相渡申候ハ、畑地無相違御戻可給候、尤地
代金相滯申候内ハ、何ヶ年茂御心任ニ御支配可被成候、
ケ様ニ相極メ申候上ハ、此畑地ニ付、横合ヨコグ少茂構無之
候、爲後日金子有合ニ有渡証文加判、仍而如件

畑地相渡主

何右衛門

翻刻・原長右衛門「書法録」他（藤村）

(マフ)
月号

月日

証人組合

名主加判

当

年季ニ相渡申畑証文之事

在所

一下々畑何反何せ分 此分米

此地代金何兩何分

右之畑地相渡地代金何兩、唯今慥ニ請取、当御年貢ニ御
上納いたし、満足ニ存候、然ル上ハ来何年ヨ貴殿方ニ而
御年貢諸役萬夏御勤被成、諸名式同様ニ御支配可被成
候、(後述)「尤右畑」(後述)年季之儀者、当何年ヨ来ル何年迄「勿論」
何ヶ年季ニ相渡申候、右地代金不殘出来相済申候ハ、
(以下欠)

三 (先納金借用証文・米前金元金滯候ニ付添

証文案)

も無違滯元利皆済可申候、仍而連印^(抹消)「先納金」借用申所、仍如件

先納金借用証文之事

明和七寅年正月

一金四拾二兩者

但文字金也

右は私共 御地頭窪田主水様御勝手向御不如意ニ付、御取統難被成、私共^五先納金被仰付候処、近年村方百姓困窮ニ付、先納金出来難仕、依之御手前様方^五達而御無心申入、爲米前金借用申所実正也、返済之義ハ、

宛名

当寅十一月十日限米百三拾表御手前様方^五御直ニ御渡し可申候、乍去舟廻シ之儀、海上無心元奉存候ニ付、

米前金元金滯候ニ付添証文之事

時之相場ヲ以国元にて売拂、利足巷ヶ月金拾五兩壹分^五之勘定を加、元利共ニ急度御勘定可申候、然上は此金子ニ於てハ村方豊凶ニ不拘、尚又

御地頭所之内御異変ニ不相構、拙々共惣連印、猶又

^(後継)

御地頭所^五「右俵納、御手前様方御直渡し之節」、不及訴差遣可申旨之下知証文等受取置候上ハ、右期月少

一先達而私共村方困窮ニ付、各^五達而折入御無心申入、去丑年三月中、米前金四拾貳兩、去丑十一月中皆済之積リニ村方連印ヲ以借用申候所実正也、然處去年中村方不作ニ候而、敢而御龜略申候心底ニは無御座候得とも、至而之凶年兩作とも損毛、御地頭收納米一向引足り不申候ニ付、去暮及御不約束、利分斗今般持參、元金及

断申候得ハ、御示談相違之旨被仰聞、御尤至極奉存候、
元来此金子ハ御地頭急難之折節、拙者共誠礪と当惑致
罷在候刻、達^而御歎申入調達被下候金子之義、一通り
とハ訳合も違申候義、縦令村方凶年ニ候共、外ニ他借
致^而も皆済可仕筈之金子ニ^而各御憤り之段御尤至極、
一言之可申様無御座候、併近年ニ無御座不作、甚困窮
ニ^而達^而猶又御歎申候、来寅年收納米ヲ以、御皆済
可申段御望申候得ハ、御承知被下候^而、千万不浅忝奉
存候、然上ハ地頭所^も不及訴、收納米如極之津出御渡
可申候、下知証文猶又今般申請候、当年之義、縦令^而
作損毛如何様之村方并地頭所異変之義有之候共、来ル
寅十一月十日限之急度、村方ニ^而相場ヲ以右之米売立、
羽銀等ニ至迄聊無相違急度皆済可仕候、右御詫御承知
被下候ニ付、別紙添証文村方連印、仍如件
明和七寅年正月